国語

子どもの作品から出た課題を次の指導に生かす

金田一清子

前はもっとゆっくりできたのに

十月、一年生の教室「目のアンテナをはたらかせて書こう」という作文の授業のときのことでした。「ちょ」ってどう書くの？「しゅ」は？と。拗音や拗長音がわからない子どもが続出。担任は「前はゆっくりできたのに…」「一番の基礎のところに時間をかけられない」と悩みを打ち明けました。「やることが多すぎて…」と現場の悩みは深いようです。

学年ぐるみの実践は圧巻

さて、国語部会では「コロナ禍の今だからこそ子どもたちの心の開放を！～学年で取り組んだ詩の実践～（四年生）」と題して、現場の若い人が連続してレポートをしてくれ、大いに学び合うことができました。その報告をしたいと思います。

校内研究で「心の動きを言葉にして、詩を書こう　感動を言葉に」の教科書単元をもとに授業を計画。十二月の研究授業にむけて、七月から学年全体で詩の実践に取り組んだところが画期的です。学年での合意がなければなかなか実現できないことであり、すばらしいことです。

七月は、「詩を楽しみ、キラリと光る一言を見つけよう」というめあてで、①好きな詩の表現をまねして書く、②友だちの詩のよいところを見つける。九月は、「見たとおり、したとおり思ったとおり、短い言葉でズバッと書こう」の行かえの工夫、書き出しの工夫など。毎月一回めあてを決めて詩を書かせ、通信に載せ読み合ってきたそうです。

生まれた子どもたちの作品から出た課題を次の指導に生かすなど、目の前の子どもから出発した授業作りで何よりも子どもたちが生き生きと取り組む、さすがです。何よりも学年全体で作品の交流を行ったり、子どもの話をしたり…と。今最も求められていることです。私たちがめざす校内研究の形がそこにあるようです。先行授業を若い実践者自身が率先して行い学年をリードするなど信頼を得ているところも光り、学年ぐるみの実践は圧巻でした。

一方、詩の授業実践に向けての日常的な取り組みの役割も大きく目をみはるものがありました。・詩のコーナーを作りいつでも詩が読める・毎日のスピーチで好きな詩を紹介・日記の取り組みから題材のタネを見つける目を育てる。どれも取り入れたいものばかりです。

心が開放された子どもたちはこのコロナ禍の中でもすてきな作品を次々と生み出していました。部会の中では、今こそ求められる実践であると大いに共感されました。

コロナ禍で一時中断していた部会でしたが、十月には部員の紹介で職場の若い人が。十一月には、東京教研の前に部会の皆さんの助言を！とこれも若い人が「文学の読み」を。部会再開、嬉しいことです。

（共同研究者）